

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
個人研究費
2008 年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	文学部・教授	野中健一 印
研究課題	文化環境学のフィールドワーク方法論の構築	
研究期間	2008 年度	
研究経費	500,000 円	
研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)		
<p>「文化環境学」は、人間の活動と環境との相互作用によって構築される文化に着目してその成り立ちを解明することを目指す、立教大学における新たな学問分野である。現代社会のグローバルな世界におかれた人間を、現実世界の人々の営みからとらえる実証研究と理解することを合わせた人間-環境関係の新たな研究視点と実証的な分析枠組みを作ることが求められている。</p> <p>本研究は、申請者が授業を担当する文化環境学における、フィールドワークの方法と実践を問題発見・テーマ設定・調査・分析というプロセスの構築を目的として、方法論の構築、具体的な手法を体系化し、フィールドワークのモニタリングによる分析を行い、問題点と課題を明らかにした。</p>		
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)		
[文化環境学] [フィールドワーク] [環境]		

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の4点にまとめられる

1. 文化環境学の概念定義とフィールドワークの意義

文化環境学は、文化を地域や集団による多様性をもったものとみなし、環境の持つ「空間性」を手がかりとして、文化と環境との相互作用を解明することをめざす。文化と環境との相互作用は、人間と環境を構成する諸要素の存在・行為・結びつき・変化が組み合わさって起こっている。この結びつきと組み合わせり方(関係性)を明らかにし、そしてその要因や因果関係を解明することが文化環境学の理論的枠組みである。それにもとづいて、具体的な人々の認識、活動、生態(環境・社会)、に注目し、現実世界に起こっている「人間と環境の生き生きとした関係」を相互関連的に解明する。その際に、人々の環境への働きかけという主体的行為に注目すること、すなわち、「なぜそうするのか?」という内面的な人間のありようとその場所でどうして起こるのかという空間性を実証的に解明することが求められる。そのためには、自ら現実世界で起こっている現象に目を向け、データを集めることから始めなければならない(野中 2008a)。

2. フィールドワーク方法論の提示

これまでの伝統的なフィールドワークに立った実証研究と現代社会のグローバルな世界におかれた人間を理解することを合わせた人間-環境の相互作用関係の新たな研究視点と実証的な分析枠組みを作ることが求められている。具体的な人々の環境認識、活動、文化事象の地域性(分布・拡散・変容)、生態史(環境変化・社会変化)、を方法論的枠組みとした。その相互作用を解明するにあたって、人々の環境への働きかけという主体的行為に注目すること、すなわち、「なぜそうするのか?」「どうしてそうなっているのか?」という問題を調査者みずから見つけ、実証的に解明することに力点を置く方法を構築した(野中 2008a)。

フィールドワークを、問題設定、方法、対象地域の設定、調査項目のデザイン、現地調査でのデータ収集、統計資料、情報の活用、分析手法、考察、執筆、発表の一連の研究プロセスに分け問題発見から研究成果の発表に至るまでの手順において、それぞれを明確にし、実践の仕方と課題を含めて、ストーリーとして再構成したテキストを作成し、フィールドワークのアシストに用いた。

3. 実践

1) 学生のフィールドワーク

日常生活に対象をみだし、その特徴を地域と要素間の相互関連に注目し、文化形成のダイナミズムを解明することを行った。そして、分布論、比較論、生活行動、地域構造、関係論などでの解明の仕方の提示、データ収集の手法(統計、行政資料、聞き取り、観察)などを教えた。対象と環境との相互関連を見いだすために、観察、聞き取り、アンケート、統計データ、行政資料等 データを自ら作成することを教える上で、問題意識と結びついた質問法の構築を行った。

入手したデータをもとに、地図化 - 対象要素の位置を示すことにより、分布に基づいた場所性を明示する。そこから特徴を見だし、いかなる諸要素と関連づけられるか、相互関連の明確化をはかる空間的分析手法-、デジタル化・定量化- 行動の特性の把握 期間、時刻、行動範囲などから空間的側面を明示し、それと社会的特性との関連づけを行う定量的手法- を教授した。

そして学生の、テーマ設定から発表にいたるまでの一連のフィールドワークを、その様子の観察とともにアンケートを用いて、テーマ設定、調査に関する意識を明らかにした。

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究成果の概要 (つづき)

2) フィールドワーク事例

フィールドワークテキスト作りのために、自らの事例研究を次の3点について実施した。

①「つながり」の理解: 「食」市場訪問- 食べ物 料理における文化、流通におけるネットワーク、生産における環境- 文化のつながりを見だし、明らかにするプロセスを示した。

②多様性の理解: 「昆虫食」身近に生息していながらも、その存在に気づかなかったり、遠ざけがちなもの、地域文化としてとらえることにより、文化と環境の多様性の理解を行う。ひとつの「転換」の事例とともに地域資源の形成を解明する事例として示した。

③「発見」と「客観化」: 地域資源の発見と活用を、自ら「歩く」ことにより、「観察」し、価値を見いだすという、主体的なアプローチをおこなうとともに、それを「客観化」して示すという具体例を作った。

4. 得られた知見

テーマ設定において学生(2・3年生、大学院博士前期課程)の対象は、一次産業、自然社会、自然環境など環境の自然的側面に関わるものばかりでなく、都市、行政、ファッション、サブカルチャーへの関心も高かった。これらの対象を環境や環境との関わり合いによって形成されているものとみる点で、環境をたんなる自然環境やアприオリなものとしてとらえるのではなく、人間の認識や活動によって社会的にも形成されたものであるという概念を教授することが大切であった。フィールドワーク=調査-解明を行うインセンティブを持つには、問題設定をはかる上で、日頃の問題意識が重要である。学生は、現代社会への関心が高く、環境問題、地域問題と合わせて、現状のさまざまな諸問題への関心が高かった。しかし、現地からの問題発見の力が弱いと、むしろ、現実に起こっている事象を、自分たちの価値観に照らし合わせることによって、自らの優位性の再確認という本末転倒的なことも生じてしまう傾向のあることもうかがわれた。

そこで、学生の関心に基づいたフィールドワークのテーマと対象の設定、それに向けたアプローチを行うための研究方法を習得すること、分析を進める上で、一つの対象をどのように展開させるかを示すことが重要である。これらは、概論など講義との連携が求められる。また、メディアやインターネット以外の情報源、自らが情報を集めること、働きかけによる情報獲得、そのための問題意識をつくることの伝授が求められる。

とくに、文化環境学が、対象とする課題として、環境としての認識-行為による文化化-資源としての活用に注目できる。そこでは、環境は主体的に形成されるものであるという点への着目と導入が重要である。そのためには、教科書的な知識や方法の教授ではなく、「個」からの実践、五感すなわち体性感覚による知識の取得と形成を教授することが重要である。これらは、1年間の授業を通じてできるものではなく、能動的な日常生活や思索を積み重ねて修得されるものである。それだけに、フィールドワーク・プロセスはこれらの体得を学生生活で身につけていく上で大いに役立つと考えられる。

こうした課題に対し、フィールドワークは現実の理解を「能動」的な情報収集と「体感」による知識の習得、それによる既存の一元的ないし固定的な価値観の「転換」をはかることに大きく寄与することが明らかとなった(野中 2008b)。環境・文化の多様性の理解と尺度を身につける、自らの視点の客観化、主体的・能動的な働きかけ、経験と体性感覚による理解、これらによる共感意識の形成つくることが可能となる。文学部が提示する、多様な価値観の理解、問題設定、自己定位といった教育にまさに合致する。フィールドワークにたった方法は学生を社会に送り出す上で大切である。

このように、フィールドワークは教育への導入効果が大きいことを示すことができた。立教大学ならではの人間性を豊かにする教育として提示していきたい。今後、この成果をもとに文化環境学フィールドワークの事例として、論文かするとともに、読本としてまとめ、フィールドワークの有用性を学生とともに社会に対しても伝えていきたい。